

William BlakeのNewtonについて

その他（別言語等） のタイトル	Blake's Newton
著者	狐野 利久
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	9
号	1
ページ	197-216
発行年	1976-12-18
URL	http://hdl.handle.net/10258/3366

William Blake の *Newton* について

狐 野 利 久

Blake's *Newton*

Rikyu Kono

Abstract

Blake's colour-printed drawing of "Newton" depicts a man in the nude, seated on a rock with some polypus under the water. He leans over the scroll on the sea-floor and measures one side of the triangle with a pair of compasses in his left hand and points to the same side with his right hand.

Such figure of Newton is, of course, neither a portrait of Isaac Newton nor a representation of his life in a certain place of this world.

In this article, I would like to make it clear that Newton was seen by Blake as contributing towards systematizers in eighteenth century who sought in science the assurance that the world could be politically and religiously tidied away.

(1)

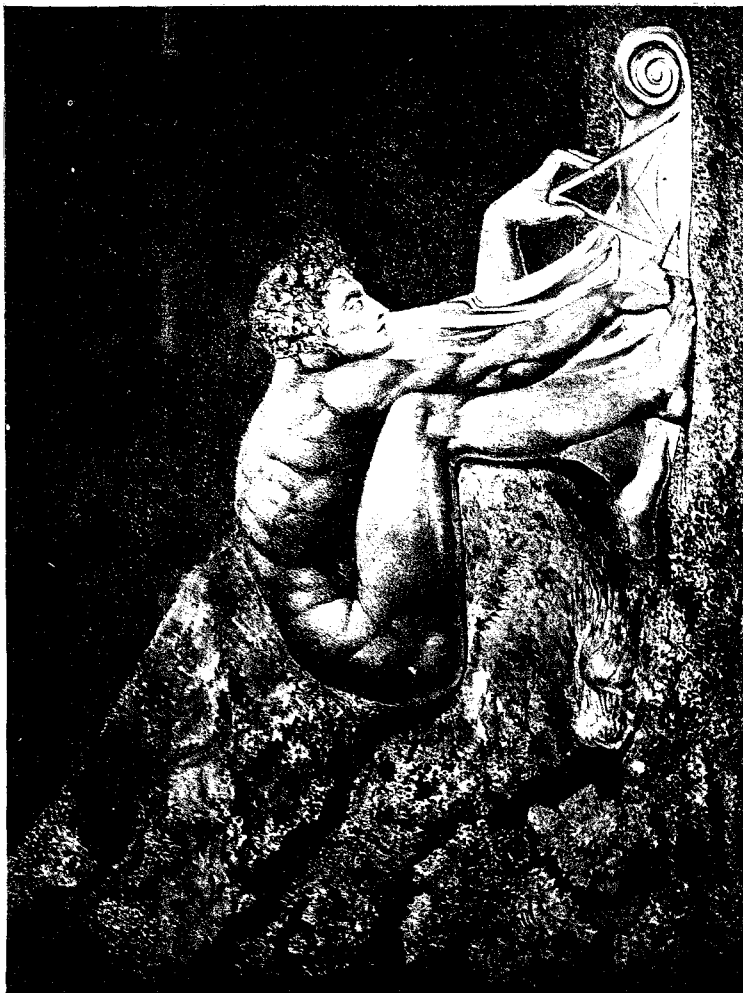
Blake の絵に、*Newton* と題する絵がある。裸の姿の男が岩の上に腰をおろし、足もとにひろげられた巻紙の上に前かがみになって、左手に持ったコンパスで作図している絵である。白いマントのようなものが左肩のあたりから、ひろげられた巻紙の上に垂れ下がっている。岩にはイソギンチャクかと思われるような polypus が附着していて、濃い緑色と青色とからなる背景の感じと共に、海底の岩場のシーンを思わせる。従って、吾々がこの絵を見ても、あの偉大なイギリスの物理学者で数学者でもあった Isaac Newton (1643—1727) の肖像画とはとても思えないし、又海底の薄暗い岩場のシーンのようでもあるので、或日或時の Newton を描いたものとも、とうてい云えないのである。しかしながら、このような絵がなぜ *Newton* と名づけられたのであ

ろうか。

詩人 Blake は、イギリス絵画史の上において特異な存在をしめている画家でもある。彼は彼の目に映じた事物や、彼の心に共感をおぼえさせるような外界の出来事を、見たまま、忠実に描く画家ではなかった。それ故彼が住んでいた London の通りも、郊外の風景も、又そこに住む人達も、そのままでは彼の絵の題材にはならなかった。彼はそのようなものを目にしても、彼の魂に映じた impression を、即ち visions を描いたのであった。例をあげて具体的にみてみよう。彼は London の郊外を歩くのが好きであったから、四季折々の花や虫、鳥等目にしていたはずである。ところが彼は自分の目にうつるところのもの、例えば花なら、花の色、形等を見、それを描くということをしなかったのである。彼は彼の心に映じたものを見、描いたのである。 *Songs of Innocence* に *The Blossom* という詩があるが、その詩に描かれている花は、吾々が現実に見る花ではなく、花というよりはむしろ炎のような動きを感じさせるものである。彼はおそらく生き生きとした花の生命とでもいうべきものを描いたのであろう。 *Infant Joy* という詩にも花が描かれているが、この花は花のような姿、形はしているけれど、現実の花ではなく、Blake の vision の花である。この花の花弁は燃え上る炎のように描かれているので、やはり内の中から燃え上る喜びとでもいうものをあらわしたのであろう。このようにみえてくると、吾々が花なら花を見て美しいと感ずる場合、美しいと感じた花は Plato 流に云うならば、実は「永遠なる美の影」とでも云うことになるのであろう。逆に云えば、「永遠なる美」を吾々は見ないで、その影を見て吾々は喜んでいるということになりそうである。Blake は *A Vision of the Last Judgment* において⁽¹⁾、

When the Sun rises, do you not see a round disk of fire somewhat like a Guinea?

という問に対して



Newton on the sea floor : colour print (1795)

O no, no, I see an Innumerable company of the Heavenly host crying
'Holy, Holy is the Lord God Almighty.'

と答えている。従って、朝の太陽を描くにしても、太陽を丸い火のかたまりとみて描く吾々とは違って、Blakeは神が天地を創造したもうた時の荘重な一瞬と受けとめ、神の栄光をたたえて乱舞する天使の群をそこにみて描いたのであった。それ故 Blakeは次のように云っている。

To Me This World is all One continued Vision of Fancy or Imagination⁽²⁾.

このようにみえてくると、Blakeが *Newton* と題する絵を、——肖像画でもなく又、*Newton* の或日或時の出来事を描いたのでもなく、特に *Newton* と題しなくても外に別の名をつけてもよさそうな絵を——かいた理由がはっきりしてくるであろう。即ち、Blakeは彼の imagination によって *Newton* を描いたのである。別な言い方をすれば、*Newton* という人は、これこれの目鼻立ちをした、こういう輪郭の顔をした人という工合に彼の目にとられ、そしてあらわされた *Newton* 像ではなく、彼の心眼がとらえた *Newton* の姿、彼の imagination によってあらわされた *Newton* という人の vision ということになるであろう。

(2)

ところで、このような Blake の *Newton* は左手にコンパスをもって幾何学的な図形を作図しているのであるが、これは何を意味しているのだろうか。

Blake の予言詩 *Europe* の Frontispiece に、*The Ancient of Day* と題する絵が描かれているが、ここでも聖書の Jehovah に相当する Blake の神 Urizen が黄金のコンパスをもって、天地を創造している様が描かれている。この *The Ancient of Day* の神 Urizen の天地創造は、Milton の *Paradise Lost* の

...in his hand
He took the golden compasses, prepared
In God's eternal store, to circumscribe
This universe, and all created things.⁽³⁾

からヒントを得て描いたといわれている。Milton のこの詩句は、云うまでもなく旧約聖書の箴言 (Proverb) 第 8 章第 27 の

When he prepared the heavens, I was there:
When he set a compass upon the face of the depth.

によっている。又箴言のこの箇所の前のところには

The Lord possessed me in the beginning of his way, before his works of old.⁽⁴⁾

とある。知恵は神が万物を創造する前に生み出され、「われはそのかたわらにあって創造者となった(Then I was him, as one brought up with him.)⁽⁵⁾」のであった。それ故、まず万物が作られて、その中から知恵があらわれたのではなく、さきに知恵があって、その知恵から万物がつくられたということである。内村鑑三は、次のように云っている。

・・・あたかも美術家が美術品を作るがごとくである。彼は確乎たる意匠を握らずして製品に取りかからない。されどもあるうるわしき理想にかられてカンパスまたは大理石に対するや、彼は万難を排してその理想を実現する。ラファエルまたはミケル・アンゼローは神の小なる模型にすぎない。されども彼らの創作は神の創造を代表して誤らないのである。神あり知恵ありて宇宙があるのである。しかるに作品を見て作家とその理想とを賞讃する人は、宇宙を見て神とその知恵とを讃美しないのである。のみならず、宇宙は偶然の作であって知恵は宇宙の産であるという。背理もまたはなほだしからずや。人の宇宙観いかんはその人にとり小問題ではない。これによって彼の品性ならびに一生の方針が定まるのである。そして古き箴言の宇宙観は近代人多数のそれにまさり、はるかに健全で深遠である。ことわざにいわく「神を信ぜざる天文学者は狂人なり」と。ひとり天文学者にとどまらず、生物学者、哲学者、文学者、法学者、すべてしかりである。宇宙と人生とに神の知恵を探るのが、すべての学問の目的であらねばならぬ⁽⁶⁾。

このような内村鑑三のコメントを手がかりとして Blake の描いた *Newton* を考えてみると、左手にコンパスを持って作図している *Newton* は、*The Ancient of Day* の Urizen に外ならないということが出来るであろう。なぜな

ら、UrizenはBlake神話においては理性（ロゴス）であり、一方のNewtonは自然科学界における偉人で、The Royal Societyの会長として25年間その要職にあって、力を誇示した人であるからである。そして又、Urizenは箴言の言葉で云えば

The Lord by wisdom hath founded the earth; by understanding hath he established the heavens.⁽⁷⁾

であったし、一方のNewtonは「宇宙と人生とに神の知恵を探」り、その知恵にもとずいて色々と業績をあげた人であったからである。又S. F. Damonによれば、BlakeのNewtonが作図しているところの巻紙（scroll）はimaginative creationを意味するという⁽⁸⁾。とすれば、Newtonの手にした神の知恵はimaginative creationを通じて、*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*（自然哲学の数学的原理）という大著となって現われたわけであるから、左手にコンパスを持って巻紙に作図しているNewtonの姿は、*Principia Mathematica*を書いているNewtonをあらわしているとも云う事が出来るであろう。

(3)

Blakeの神話にMiltonの*Paradise Lost*に相当する話がある。即ち、その昔吾々の先祖であり、又Atlantic ContinentのpatriarchでもあったAlbionは、四性（Four Senses）の働きを完全に統一して、均整を保って楽園に住していた。四性とはimagination, reason, passion それにinstinctの四つである。

Four Mighty Ones are in every Man; a perfect Unity
Cannot Exist but from the Universal Brotherhood of Eden,
The Universal Man, to whom be Glory Evermore.⁽⁹⁾

ところが四性の間でconflictが生じ、そのためAlbionは楽園を喪失して、長い眠りに落込んだのである。なぜそのような四性の間でのconflictが生じたのであろうか。

Blake は四性のそれぞれを属性とする 4 人の神を更に作った。即ち imagination を属性とする神を Urthona と名づけ、reason を属性とする神を Urizen, passion を属性とする神を Luvah, そして instinct を属性とする神を Tharmas というようにである。そしてこれらの神々には更に支配する国があって、Urthona の国は北に、Urizen の国は南に、Luvah の国は東に、そして Tharmas の国は西にあった。これら 4 人の神々は、このように国を支配し、方位を守り、おのおのの職分を發揮しておれば問題はなかったのであるが、Urizen が野心をおこして Luvah に自分の領有する南の国の支配を暗黙の中に認める代りに、自分が Urthona の領有する北の国を Urthona にとって代って支配することを認めさせようとしたのである⁽¹⁰⁾。そのために Albion は樂園を喪失することとなり、永遠の眠りに落入了たというのである。

When Luvah assum'd the World of Urizen to the South
And Albion was slain upon his mountains & in his tent,
All fell toward the Center in dire ruin sinking down.⁽¹¹⁾

Blake が彼の神話において力を入れて書いているのは、Urizen が全世界を支配しようとするさまのようである。四性が互に均衡を保ち、調和の状態にあった時、Urizen は first born Son of Light⁽¹²⁾、即ち the Prince of Light⁽¹³⁾ と呼ばれ、その国は the glorious World⁽¹⁴⁾ で

...sweet fields of bliss
Where liberty was justice, & eternal science was mercy.⁽¹⁵⁾

であった。ところが四性の均衡が破れて、Urizen が他を支配しようとする時、彼は最早 the Prince of Light ではなく、頑固で冷酷な老人のイメージにかわるのである。そして Blake にとってはそういう Urizen、即ち理性が問題だったのであった。

では Reason が Imagination の働きをおさえ、これを支配すると Reason はどうなるのであろうか。

The Spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated
From Imagination and closing itself as in a Ratio
Of the Things of Memory, It thence frames Laws & Moralities
To destroy Imagination, the Divine Body by Martyrdom & Wars.⁽¹⁶⁾

前述の聖書の箴言 (Proverbs) の中で、知恵は神のかたわらにあって創造者となつて働くということが述べてあったが、Reason が Imagination を支配すると、「私」のかたわらで創造者となつて働くようになるのである。その結果世の中のすべての中心がこの「私」であり、「私」以外のすべてのものは「私」から働きかけられる「客体」として、「私」によって分別され、分析されてゆく対象となつてしまつて、必然的に一つの法則とか公式とかがつくり出されて、それらの法則や公式にもつづいて更に善悪とか、真偽とかという工合に、二元的に分析され、分別されてゆくことになる。

The Combats of Good & Evil is Eating of the Tree of Knowledge
The Combats of Truth & Error is Eating of the Tree of Life.⁽¹⁷⁾

従つて「私」のかたわらで創造者となつて働く理性は Satan であり、「私」はエゴそのよとなつてしまうのである。

Satan, the Spector of Albion, Who made himself a God & destroyed the
Human Form Divine.⁽¹⁸⁾

では理性が情熱 (passion) を支配するとどうということになるというのであろうか。情熱とか情念を意味する言葉に enthusiasm という言葉がある。enthusiasm の—thus—はギリシャ語の *theos* (神) ということであるから、「神靈に憑かれる」といった程の意味になる。ところがこの enthusiasm を 18 世紀の偉大なる批評家 Dr. Johnson が彼の編纂した最初の近代的英語辞典で A vain confidence of divine favour or communication (神の恩恵をうけている、神との交信をゆるされているかのように思いこんでいるくだらない妄想) と定義つけたのであった⁽¹⁹⁾。Henry Crabb Robinson の日記に⁽²⁰⁾、Blake が Socrates と会つたとか、Jesus Christ と交つたとかと Robinson にのべた

ことが書かれているし、又 Milton が Blake の前に現われて自分の書いた *Paradise Lost* によって迷わされることのないように注意したとかという話を Robinson が残しているので、Dr. Johnson 流に Blake をみると、「本当にくだらない妄想にとりつかれている男」になってしまうのである。だが、Blake が Socrates や Jesus Christ に合い、Milton と語ったということは、彼等から受けた感動がいかに大きかったかということ、しかもその感動が何時もたびたび起ったということを示すのであろう。ところが 18 世紀は「passion とか enthusiasm というものが人間をして人間たらしめる理性によって統御されるべきものであって、passion とか enthusiasm の命ずるままに隷属化されることは人間としてむしろ恥ずべきものとして考えられていた⁽²¹⁾」時代であったのである。したがって Romanticism の勃興によって、passion とか enthusiasm というものが解放されるまで、情熱の詩人 Blake は、

We live as One Man, for contracting our infinite senses
 We behold multitude, or expanding, we behold as One,
 As One Man All the Universal Family, and that One Man,
 We call Jesus the Christ, and he in us, and we in him
 Live in perfect harmony in Eden, the land of life.⁽²²⁾

と叫ばなければならなかった。

では理性が本能 (instinct) を支配する場合はどうであろうか⁽²³⁾。Blake は、

Prisons are built with stones of Law,
 Brothels with bricks of Religion.⁽²⁴⁾

といっている。宗教は欲望を罪悪とし、本能を sin とみなすから、欲望や本能が宗教に隷属する限り、罪悪感とか罪の意識とかがつきまとうことになる。Brothels は宗教——愛の宗教ではなく裁きの宗教——が作り出したものであって、彼女らは宗教のために暗い奈落の底に沈まねばならないのである。神の許しを説かねばならぬ宗教が、どうして欲望のままに生きることを神の怒りにふれるということに禁じ、罪となると考えているのかというのが

Blake の考えのようである。宗教、特に Jehovah の神である Urizen からの解放こそ、人間性の回復となることを彼は確信していたようである。

(4)

このような Blake の神話はとりもなおさず Blake の目に映った 18 世紀のイギリス社会の姿でもあった。18 世紀を一口で云えば、「第 18 世紀の前半は王政復興時代と同じく法則を重んじた時代であり、その後半は因襲の重さに苦しみつつも容易にこれを脱し得なかった時代である」⁽²⁵⁾ということになる。即ち古典や古代の美しい作品を手本として、形式と内容の調和のとれた作品を心掛けていこうとするあまり、やたらと規則や法則にしばられて、「天真爛漫な感情の発露よりも体よく仕上げをつけることこそ肝要と思ひ、情熱よりも上品を重んじ、想像よりも好奇心に駆られ」⁽²⁶⁾た作品が作られたのである。それ故、絵画においては Thomas Gainsborough (1727—88) や Sir Joshua Reynolds (1723—92) などの肖像画家は elegance で severity のある肖像画を描き、特に Reynolds の場合は「天使のように描いてもらいたい女や英雄的な姿をのぞむ男がレノルズの画室に殺到した」⁽²⁷⁾程だといわれている。Blake は油彩絵の柔い色調や色彩に幻惑を感じている人達に対して、

Such Artists as Reynolds are at all times Hired by the Satans for the
Depression of Art— A Pretence of Art, To destroy Art.⁽²⁸⁾

といっている。又詩についてみても、前述のように rhetoric が重んじられた時代であったため、抒情的情調に富む詩人の容れられるところとはならず、そのため例えば Willam Cowper (1731—1800) や William Collins (1721—50) は狂人となり、Thomas Chatterton (1752—70) は自殺しなければならなかった⁽²⁹⁾。1756 年に生れた Blake は多情多感な青年時代にアメリカ独立戦争やフランス革命という時代の変革をもたらす事件を経験しているだけ、法則や因襲にとらわれた時代に勇敢に挑戦し、imagination の古渇した詩や絵画を批判したのであった。Blake の詩集 *The Book of Urizen* に Urizen が水中でお

ばれているところを描いた絵が入っている。水は Blake においては materialism を象徴しているため、Urizen が水中でおぼれているということは、吾々の知性あまりにも過信されて、もともと知性の持つ融通無碍な働きが枯渇してしまい、硬直したさまをあらわすのであろう。知性の働きが硬直すると何でも彼でも理念とか法則とかで処理することになってしまい、そのため想像や情熱や本能の働きが押えられて、結果的には閉ざされた死の世界になってしまう。Blake にあっては物質界というものはそういう閉ざされた死の世界なのである。

同じようなことが、岩に腰をおろし、左手にコンパスをもって作図している海底の *Newton* についても云えるのではないであろうか。即ち *Newton* が *Principia Mathematica* で発表した偉大な業績は、世の中一切の事柄すべてを *Newton* の諸法則にもとずいて処理してゆこうという人達に利用されて、結果的には *Newton* は物質界に貢献する何ものでもなかったのだということをして Blake はこの絵であらわそうとしたのではなかったらうか。

(5)

Jacob Bronowski は *Newton* の法則が社会を秩序だて、体系づける理論として利用されたとして次のように説明している。

Isaac Newton's *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica* had been printed in 1687, at the beginning of the Whig age. Richard Bentley, greatest of Whig scholars and bullies, had at once made 'the Eternal Laws of Gravitation' another name for Nature. And Whig society, happy to learn that nature was so ordered, honoured Newton justly. But the honour was not paid to science: it was paid to order. Bentley was not a scientist, but a divine anxious to prove the world held in a god-given order. John Ray and others put their science to the same use. Bentley had Newton's blessing in founding his order on gravitation. He chose gravitation, because he rightly saw that it closed post-Renaissance astronomy. Throughout the Whig age, Newton's and other sciences were not tools for fresh discovery. They were used to close and enclose the world in another system as rigid as that of Aristotle, which the medieval church had put to the same use. It was an age of systematizers, who sought in science the assurance that the world could be tidied away inside the head

of a rational Whig god. This is why Blake held that its atomism was 'to Educate a Fool how to build a Universe with Farthing Balls'.⁽³⁰⁾

Bentley は 1692 年 *A Confutation of Atheism* と題して講演した時、神の摂理を証明するのに Newton の法則を用いたのであった。彼は *Principia Mathematica* を理解するだけの数学的知識を持っていなかったにもかかわらず、頭のよい思想家であったから、さっそく神学の説明に利用したのである。

Tory 党支持者の John Wesley は、おのれを無にして神に救いを求めなければならぬように、おのれを無にして王に敬意を払い、法に服さねばならないと考えて、

None of us shall either in writing or in conversation speak lightly or irreverently of the Government. We are to observe that the oracles of God command us to be subject to the higher powers; and that honour to the King is there connected with the fear of God.⁽³¹⁾

と主張した。18 世紀はほとんど Whig 党が政権を握っていた時代であり、従って Walpole や Pitt 等の大政治家達が Whig 党から出て内憂外患にあるイギリスの政治にあたっていた時代である。そういう時代に保守主義者の Wesley が Whig 党政府の許で、法秩序や社会秩序を守ろうとしたことは、逆に云えば当時のイギリス社会においては、大衆の風紀が如何に乱れていたか、又宗教心を持たない下層階級の人々が如何に不平不満を抱き、そして反抗する機運にあったかということを示すものである。事実この頃の風紀の乱れは William Hogarth (1697—1764) の描いた「好色一代女 (*Harlot's Progress*)」(1732) や「好色一代男 (*Rake's Progress*)」(1765), 「当代結婚風俗 (*Marriage-à-la-Mode*)」(1743) 等を見ればよくわかるであろう。又 Hogarth の絵に「ジン横丁 (*Gin Lane*)」(1750) というのがある。これは当時のイギリスの下層階級の人々が昼間から仕事をせずにジンを飲んでいるさまを描いたものであるが、1720 年から 1750 年までの 30 年間、London での死亡率は出生率をうわまわったという記録も残っているので⁽³²⁾、当時の人々はうっ憤を晴らすためにジンを飲み、そしてジンにうつつをぬかしていたことがこの絵

によって理解されるのである。

Riot and Slaughter once again
 Shall their career begin:
 And ev'ry parish sucking babe
 Again be nurs'd with Gin.⁽³³⁾

という Sir Chales Hanbury Williams の言葉も当時の社会をよくあらわしていると思われる。

従って、Newton の法則は 17 世紀末頃から世界像の転換をひきおこすきっかけをつくり、それをうけついで次の 18 世紀では科学と結びついて技術のいちぢるしい進歩をうながして産業革命へと至るのであるが、一方において当時の宗教界や世俗社会の混乱をおさめるよりどころにも又、利用されたのであった。それ故 18 世紀は、文学においても神学においても、又政治社会の面においても、いわゆる astronomical morality⁽³⁴⁾とでもいうような、強い tradition の許にすべてがあったわけである。そして Blake はそういう tradition に反抗し、Newton の法則をはじめ、色々な規則、因襲等が人々の自由な活動に足かせをはめ、又時間空間の中に imagination や passion, instinct を閉じ込めておこうとする限りにおいて、最早それらの法則や因襲は形骸に等しいと断じたのである。Blake の *Newton* が海の底で作図しているのは、そういう Blake の主張を表現したものなのである。

(6)

ここで吾々には一つの疑問が残る。それは人間の自由を拘束する規則とか法則とか因襲に反抗し、imagination や passion, instinct の解放を叫んだ Blake 自身が 14 才の時 James Basire の許に徒弟として住みこみ、7 年間の間 Basire の許で engraving の技術を学んだということについてである。当時イギリスにおいて、画家は無教育な手職人とみなされていた。そういう時代にあって engraving の技術を学び、画家という一人前の手職人になるためには、やはりちゃんとした一つの技法を身につけなければならないし、技法を身

につけるためには勝手気ままは許されず、むしろ tradition にもとづく束縛やきびしい因襲の許におかれていなければならないはずである。そして Blake の場合、徒弟時代に Basire の命をうけて Westminster 寺院等でゴシック様式の monument 像を模写させられたということであるが、模写するためには自由創意とか、自由な観察、規範にとられぬ表現等、とうてい許されぬことであつたらう。ところが Blake は忠実に模写するというこの仕事を、5年間打ち込んでやったということである。このような若い頃の Blake を考える時、彼が規則や法則、因襲、或は伝統に反抗するのは、どういう事からなのであろうかという疑問が起ってくる。

Blake の *Annotations to Reynolds* に次のような言葉がある。

To learn the Language of Art, 'Copy for Ever' is My Rule.⁽³⁵⁾

この言葉にもとずいて、彼が Westminster 寺院等で monument 像を模写するため5年間もこもつたということを考えてみると、模写するという事は、要するに、彼にとっては「芸術の言葉を学ぶため」であつたのだということになるであろう。それから又、同じ *Annotations to Reynolds* に

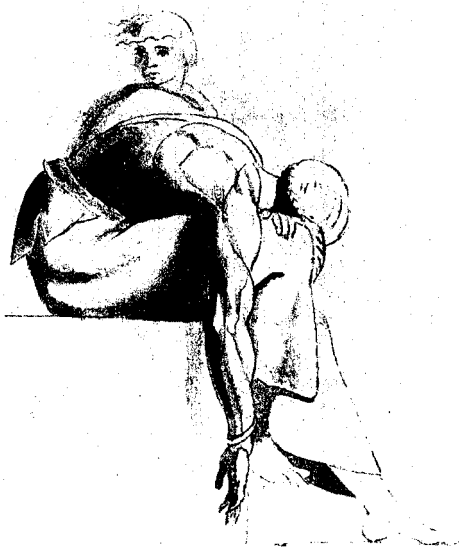
Imitation is Criticism.⁽³⁶⁾

という言葉もあるので、おそらく模写しながらも、彼は独自の表現様式を求めて創意工夫が彼なりにされていたことであつたらう。この場合の Criticism はそういうように解釈したい。そうすれば Sir Anthony Blunt 教授の次のような説明に、うなずけるのである。

When he borrows a pose from some other artist, he so completely transforms the figure that it seems to be wholly Blakean and shows at first sight no trace of its alien origin. Indeed it seems probable that Blake was often unaware that he was borrowing, and, when he was once challenged on an individual case, he denied that he had ever seen the original which he was accused of imitating. The evidence to show that he did borrow extensively is, however, overwhelming, and one is forced to conclude that Blake's visual memory was so remarkable that, if he had once seen an image, it was retained in the great



Abias, by Ghisi after MICHEL ANGELO



Abias, by Blake after GHISHI

storehouse of his imagination, together with thousands of other images derived from nature, or other works of art, or the invention of his own fantasy.⁽³⁷⁾

又、Blunt教授によれば、芸術家というものは偉大な作品を研究し、それらの作品からモチーフを借用し、自己の絵の中にとり入れてゆくべきものはとり入れて行くべきだという考え方が16世紀以来、芸術家の間で受け入れられていたということである⁽³⁸⁾。従って今日問題にされるような盗作とか、plagiarismとかということは芸術の勉強のためには問題にされなかったのであった。Blakeはそういう当時の伝統というか、慣習というか、そういうものに従って、Westminster寺院等で中世のゴシック様式のmonument像を模写し、或は敬愛し心酔していたRaphaelやMichelangeloの絵を学び、借用し、そして自分のものとして描いていったのであった。

Blakeの*Newton*について云えば、Blunt教授の説明によると、これはSistine Chapelのルネット(*lunettes*)の一つにあるMichelangeloの*Abias*の像にもとずいて出来ているということである。というのは、このMichelangeloの*Abias*をGhisiという人がengravingしているのであるが、このGhisiのengravingをBlakeが正確にcopyしたのが現在大英博物館にあるからだというのである。そしてBlunt教授は、Blakeが*Newton*を描く時*Abias*の像のposeを少し変え、又腕や体の筋肉を描くのに、Michelangeloのオリジナルのものよりも、ずっと強調してengravingしてあるGhisiの方にならって、更に諷刺的に描いていると云っている⁽³⁹⁾。そう云えばBlakeの*Newton*は背中あたりの筋肉が少しへビのうろこのような感じがするのは、*Newton*に対するcaricatureなのであろうか。更にBlunt教授は、

...however much he was basically indebted in his poetry to dictation from an external source, he was not a slave to it and like all poets he altered and improved his first drafts.⁽⁴⁰⁾

と云っている。それ故、Blakeの詩においても、多数の哲学者、神学者、詩人達等から借用した思想や言葉、表現等が彼の心の中に呼収され、混ぜ合され、

変形されて、抒情詩となり或は、予言書となったということが考えられる。

そこで、前述の疑問に対しての解答であるが、Blake は彼の imagination や passion, 或は instinct が reason によって拘束される限りにおいて、彼は猛烈に反抗したのであるけれども、法則とか、tradition とかが reason の手先とならない場合は、すなわにそれらに従いながら芸術の言葉を学び、一方において自由に imagination の翼をのばし、passion をもやし、或は instinct そのものであったのだというように説明出来るのではないだろうか。事実、Westminster 寺院で模写の仕事をしていた時も、彼の imagination は自由に翼いたればこそ、Shakespeare をまねて、未完ながらも詩劇 *King Edward the Third* 等を書いてみたのであった⁽⁴¹⁾。ところが逆に彼の imagination なり、passion なり、或は instinct なりが束縛されると、彼は我慢しきれなくなって爆発するのであった。例えば、Royal Academy の Library で Moter に Blake が、Raphael や Michelangelo を勉強するのをやめて、Le Brun や Rubens を勉強しなさいと instruction された時、Blake は

How I did secretly Rage!⁽⁴²⁾

と述懐している。色彩よりも線に生命を見出していた Blake にとって Le Brun や Rubens の絵は完成した作品 (Finishd Works of Art) どころか、始まりでもなかったのである。そういう Blake であったから、劃一的な教育の場となる学校にもなじめず、そのためか彼自身小学校にも入学せず、長じて自ら進んで入った Royal Academy も中退したのであった。次の *The School Boy* という詩は、彼の心をよくあらわしているというであろう。

The School Boy

I love to rise in a summer morn
 When the birds sing on every tree;
 The distant huntsman winds his horn,
 And the sky-lark sings with me.
 O! what sweet company.

But to go to school in a summer morn,

O! it drives all joy away;
 Under a cruel eye outworn,
 The little ones spend the day
 In sighing and dismay.

Ah! then at times I drooping sit
 And spend many an anxious hour,
 Nor in my book can I take delight,
 Nor sit in leaning's bower,
 Worn thro' with the dreary Shower

How can the bird that is born for joy
 Sit in a cage and sing!
 How can a child, when fears annoy,
 But droop his tender wing,
 And forget his youthful spring?

O! father & mother, if buds are nip'd
 And blossoms blown away,
 And if the tender plants are strip'd
 Of their joy in the springing day,
 By sorrow and care's dismay,

How shall the summer arise in joy,
 Or the summer fruits appear?
 Or how shall we gather what griefs destroy,
 Or bless the mellowing year,
 When the blasts of winter appear?⁽⁴³⁾

生の喜びのために生れて来た Blake にとって、理性の籠の中に閉じ込められては、歌うことも描くことも出来なかったのである。だが Blake の生れた 18 世紀は Newton の科学を新しい発見のための道具として用いるよりも、むしろ社会全体を硬直した体系の中に閉じこめるのに利用した時代であった。或は Bronowski の言葉で云えば、Blake の時代は

It was an age of systematizers, who sought in science the assurance that the world could be tidied away inside the head of a rational Whig god.⁽⁴⁴⁾

であったのである。従って Newton はそういう体系化をめざす人達の代表と Blake は考え、そして又、当時の詩、絵画、思想、社会すべてを象徴化して

A dark black Rock & a gloomy Cave⁽⁴⁵⁾

とも考えたのであった。そして、そういう「暗い黒い岩とゆううつな洞窟」はとりもなおさず彼の *Newton* でもあったのである。従って Blake の *Newton* という絵は、18 世紀のすべての問題をとらえ、あらわしているということが出来るであろう。

以上考察してきたことをまとめて結論づければ、政治的にも、宗教的にも、又風俗的にも、色々混乱していた 18 世紀のイギリス社会に、何とか秩序をもたらしたいと願った人達が科学にそのよりどころを求め、その結果 Newton がそれらの人達に利用されて、自由のない窒素するような社会の形成に彼自身貢献することとなったというように Blake は考えていたので、その結果 *Newton* と題するこのような絵が生まれたのだと思うのである。

(昭和 51 年 5 月 21 日受理)

(註)

- 1) Geoffrey Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. The Nonesuch Press. 1957. p.617
- 2) *Ibid.*, p.793
- 3) *Paradise Lost*, VII, ll.224—227
- 4) *Proverbs*, 8:22
- 5) *Ibid.*, 8:30
- 6) 内村鑑三聖書註解全集 第 5 卷 教文館。昭和。p.183
- 7) *Proverbs*, 3:19
- 8) S.F.Damon: *A Blake Dictionary*, Brown University Press. 1965. p.299
- 9) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. p.264
- 10) *Ibid.*, pp.277—278
- 11) *Ibid.*, p.500
- 12) *Ibid.*, p.283
- 13) *Ibid.*, p.326

- 14) *Ibid.*, p.524
- 16) *Ibid.*, p.714
- 17) *Ibid.*, p.615
- 18) *Ibid.*, p.512
- 19) 中野好夫：英文学夜ばなし。新潮社。昭46。pp.63—64
- 20) 狐野利久：詩と神話。室蘭工業大学研究報告。文科編。第6巻第2号。昭43。参省。
- 21) 中野好夫：英文学夜ばなし。p.63
- 22) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, pp.664—665
- 23) 狐野利久：W.Blakeの詩 *Visions of the Daughters of Albion* について。室蘭工業大学研究報告。文科編。第8巻第3号。昭51参省。
- 24) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. p.151
- 25) 斉藤 勇：英文学史。研究社。昭28。p.216
- 26) *Ibid.*
- 27) 岡本謙次郎：ブレイク。美術家評伝双書。岩崎美術社。1970。p.108
- 28) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. p.452
- 29) 斉藤 勇：英文学史。pp.223—224
- 30) Jacob Bronowski: *William Blake and the Age of Revolution*. Routledge & Kegan Paul. London. 1965. p.137
- 31) *Ibid.*, p.146
- 32) Dorothy George: *London Life in the XVIIIth Century*. London. 1925. p.27
- 33) *Ibid.*, p.36
- 34) Blackstone: *English Blake*. Archon Books, 1966, p.329
- 35) G.Keynes: *The Complete Writings of Writings of William Blake*. p.446
- 36) *Ibid.*, p.453
- 37) Anthony Blunt: *The Art of William Blake*. Columbia University Press. 1959. p.32
- 38) *Ibid.*, p.32
- 39) *Ibid.*, p.35
- 40) *Ibid.*, p.22
- 41) 狐野利久：Blakeの詩劇 *King Edward the Third* について。北海道英語英文学。第17号。参省。
- 42) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. p.449
- 43) *Ibid.*, p.124
- 44) Jacob Bronowski: *William Blake and the Age of Revolution*. p.137
- 45) G.Keynes: *The Complter*
- 45) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake*. p.817